

経済学の理論化

——リカード「経済学原理」成立から
マルクス『資本論』三部構成の完成まで——

櫻井 毅 著

序言

本書は各章の表題で掲げた四つの論稿から成り、それぞれの論考は執筆の時期を異にし、取り扱っている対象も重なりは多いが、それぞれ内容も扱いも同じとはいえない。しかしそれらはこの三、四年の時期に連続して書かれたものであり、背後の問題意識は共通である。

もともと商品経済の発展とともに、マンデヴィル『蜜蜂物語』(Mandeville, 1714)にみられるように、その副題に示される「私悪は公益」という風潮は一般的になり、さらにそれはジェームズ・ステュアート『経済学原理の研究』(Steuart, 1767)の画期的な出現によって、経済人の自由な活動が国家の為政者による、いわば暗喩的に結合された「自由社会」として展開されていくのであり、また、それを引き継いだアダム・スミスが、その『国富論』(Smith, 1776)によって、その国家を個人の「利己心」による自律的な社会的編成原理に基づく「商業社会」として改めて一つの経済思想として構築しなおし、まとまりある経済学として体系化することに成功したとみてよい。スミスの『国富論』は、資本・賃労働の関係を通じる生産、流通、分配、消費、蓄積、再生産などに関する、そしてその経済全般に対する学説批判や政策批判を含む広範な体系であり、経済学の道をいわば初めて切り開いたジェームズ・ステュアートの『経済学原理の研究』の成果を十分に引き継ぎ、さらにテュルゴーなど先学同学の研究成果をも吸収した経済学の総合的で体系的な書物であって、その後非常に大きな影

響をもたらすものであった。それは資本主義の市場経済の状況を克明に分析してその機構を明らかにして叙述するというものであって、その展開の方法もかなり意図的なものであった。

リカードがあらたに試みたのは、スミスの『国富論』を踏襲しつつも、進んでその中の理論的部分の論理の徹底であった。よく知られるように、若い時から金融業界で勤務していたリカードは、休暇で家族とバースの温泉に行き、その貸本屋でスミスの『国富論』を初めて読んだと伝えられている。経済学への関心と興味を魅きたてられたのであろうか。のち、金融問題についての数多くの論稿を発表するようになっていたリカードが、イギリスの対外貿易における穀物価格と地代との関連を巡ってマルサスと紙上で論戦した (Ricardo, 1815) 際、そこでのリカードの主張に強く衝撃を受けたのはジェームズ・ミルであった。ペンタムの盟友として哲学的急進主義派の指導者であり、経済評論家で社会活動家でもあったミルは、その頃すでにリカードと親しい友人関係になっていた。かねてイギリスの地主制度に反撥し自由貿易主義を信条とし、『商業擁護論』 (Mill, James, 1808) を発表していたミルにとって、リカードの主張はまったく理にかなったものであり、彼はその論旨に大いに賛同し、その論点をもっと広げて大きな著書にして出版するように即座に勧誘した。その強い勧めに心を動かされたリカードは、やがて穀物の量を基準とした物量関係式の考えからアダム・スミスの労働価値説を批判的に取り入れて、投下労働による商品の価値規定を基軸とする経済学の原理の執筆に踏み切ることを決意することになるが、その時、その演繹的な展開の方法をジェームズ・ミルによって伝授

されたとみられている。ジェームズ・ミルは、その頃、自らの代表的な著作の一つである『英領インド史』(Mill, James, 1817)を執筆していた時期と重なっており、その著作は典型的な演繹的な手法で書かれていた。リカードは初等教育しか受けていなかったが、知的興味にあふれた大変に優れた才能の持ち主とされ、すでに数々のイギリスの金融問題についての論考を発表していた。親しい友人となったジェームズ・ミルとの交友を通じて親密な会話の中で教授された執筆の方法を生かし、自らの独創的なアイデアをその新しい著述の中に見事に表現してみせたのであった。手を貸すつもりであったジェームズ・ミルは何も手助けする必要がなかったほどだった。それは価値論から地代論そして価格論、賃金論、利潤論へとつながるもので、続く「外国貿易論」にみられる理論的整理を見ても、方法上の新しい問題を提起するものでもあり、経済学の原理として、よいまとまりを見せているものと思われる。

もちろんリカードのこの著作『経済学原理および課税について』(Ricardo, 1817)は、経済学の原理および課税として主に経済学の原理にかかわる雑多な諸問題を補足的に取り上げた三つの部分からなる書物であるが、題名にもあるように、経済学の原理というものを中心課題に据えたもので、そこでの中心となる部分の演繹的な論理展開は、イギリスでは従来あまりなじみのなかったためもあって、ただたんにミスを超える経済学としてはもちろんであるが、その方法の精緻さに当時は驚かされたのである。リカードの名声は一気に上がった。それは商品の絶対価値という抽象的概念から始

まって「上向」する論理の筋道を初めて商品経済の理論体系として演繹的に明らかにしようとしたものであり、その方法は当時の論壇を騒がせたものである。それは単にリカード学派だけの問題ではなく、その方法の特徴は Thomas De Quincey のようなリカードの称賛者によって知られるところである (De Quincey, 1844) が、一九世紀の後半になると、いわゆるイギリスの歴史学派と称せられる人たちに よって激しく反発を受け批判されることは周知のとおりだ。ここでは詳細には触れられないが、そこにはリカードの経済学に対する賞賛と批判が渦巻いていたといつてよい。

ただ、いずれにせよ、リカードの経済学の原理的研究が、経済学の歴史にとって一つの古典的頂点をなすものであったことに間違いはない。本書第一章はリカードによる演繹的手法による「経済学原理」の確立の歴史的意義を評価し、盟友ジェームズ・ミルの貢献とその役割に言及し評価する。

しかしそのリカードにとっての問題は、その論理の一貫性を結局は貫徹できなかったことであった。投下労働による絶対価値の定義から出発するその自らの論理展開は、その価値規定に修正を余儀なくされたからである。後に詳しく明らかにするように、彼の投下労働量による価値規定と、市場における平均利潤の存在による価格の決定との間の不整合を解決することができなかったからである。本書第二章はリカードの挫折の過程とマルクスによる解決の歩みを追う。そしてマルクスが迷いながらも解決の方向を探る苦難の過程を、多少の余談を交えながら語る研究会の報告である。

リカードはそれを価値総額と価格総額の総計一致によって一応解決を試みた。しかしそれら両者を共通に尺度するものの探求に苦慮した。当初は内的尺度である労働だけで作られる金（商品）を外価値尺度に設定した。しかしその設定はあまりに空想的に過ぎる。さらに彼は金生産に必要な資本設備、その資本構成や回転期間を、すべての生産の中位条件に設定してみた。いい試みであったかもしれないがこれもまた非現実的な想定でしかない。リカードは急病で倒れるまでこの「不変の価値尺度」の問題に悩んだ。そして失意のうちに世を去った。ジェームズ・ミルやマカロックがこの問題を引き継いだが解決できるはずもなかった。

リカードの後に登場するのはジェームズ・ミルの息子であるジョン・スチュアート・ミルである。彼は幼い時から父親の厳しい教育指導を受け論理学や経済学などの学問研究をおこなってきた。「経済学原理」(Mill, J. S., 1848)とともに彼の代表作でもある『論理学体系』(Mill, J. S., 1843)は、彼の演繹的方法の整理、展開を目指したもので、父親やリカードの方法にも触れて、それを評価しつつも、それを仮説的演繹法として、極端な傾向には批判を加えるというものである。ジョン・スチュアート・ミルの方法論については、ここで詳しく論じることができないので、やや旧稿に属するが、詳しくは関連する拙論をいくつか参照していただくほかはない⁽¹⁾。私はマルクスもジョン・スチュアート・ミル著『経済学原理の若干の未解決な諸問題』(Mill, J. S., 1844)に発表された「上向、下向」論など初期の諸論考を含めて、ミルの議論に相当の影響を受けているものと考えている。それは有名なマルクスの草稿

『経済学批判要綱』（一八五七—一八五八）（Marx, 1941）に付せられている「序説」の中の「経済学の方法」はジョン・スチュアート・ミルのものを下敷きにして、いるようにすら感じられるからである。この点については以前触れたことがある。ただ、ここで問題になるのは、マルクスがリカードの経済学に学びつつ、その価値論の修正の難問に同じく突きあたったとき、いかにそのリカードの挫折を突き破って問題を解決していったかという話である。詳しくは、本論のテーマでもあるので、このあと詳細に論じるつもりであるが、簡単に言えば、マルクスによるリカードの演繹的論理の限界を超える弁証法的論理への転換である。演繹的論理からヘーゲルの弁証法的論理の採用によって問題を解決していったということである。この鮮やかな転回が価値の修正問題という難問を解決したということだと考えるのである。

本書の第三章はマルクスの最終的な解決の内容をやや煩雑になったが詳しく論述したものである。そして最後の第四章では、その『資本論』の三部構成、なかんずく第三部の成立の意義がいかに大きかったかを、『資本論』第三部の本文の生産価格についての叙述に即して具体的に説明を加えて明らかにすることをもって、本論の最後の狙いとする。

つまり価値と生産価格は同一平面で比較秤量される対象として存在するものではなく、剰余価値は各資本家に全額取得されながら、各資本家はそれとは異なる原理で配分される平均利潤を受け取るということ、その配分は絶えざる資本構成の変化や資本の回転期間の変動によって補正され、最終的

には、繰り返し価値と合致する方向で生産価格の運動が貫かれるというものである。価値と生産価格は、後者が前者の修正物ではなくて、価値と価格関係という言葉ならば立体的な構造で結びついているという、商品経済にとつて本来的なあり方を示しているだけの話だということである。そのことが以下本書で述べていくつもりの内容である。

この点を改めて明確にすることで、長年にわたるマルクスの労働価値説の通俗的理解も退けられるのではないだろうか、と秘かに期待しているのである。価値を確定しているはずの確実な「時間」そのものの規定根拠さえも、「地動説」に従えば、地球とともにズレ動いているのである。

(1) 櫻井毅(一九七五)、(のちに櫻井毅一九八八、「第二章 リカード理論の形成とジェームズ・ミル」所収)を参照されたい。

三	リカードの価値の修正論およびその影響	61
四	マルクスの生産価格論——価値から生産価格への転化	70
五	価値・生産価格の次元の相異論と労働価値説の論証問題	77
六	「労働価値説」の論証問題	86
七	生産価格の内的基礎としての社会的労働配分	96
八	『資本論』あるいは「経済原論」のもつ役割	107
	(配付資料)	115

第三章	マルクスが自らの生産価格概念に課した真意——『資本論』第三部の方法的意図——	117
はじめに		117
一	価値と生産価格の本質	118
二	「転化問題」の混迷	140
三	エンゲルス「国民経済学批判大綱」からマルクスの「経済学批判」へ	144
四	Gestaltung——舞台での変容	148
五	あらためて価値の概念を確認する	161
六	価値形態論と価格	167
七	価値形態論の射程と限界	170
八	価格のみが価値量を示す	174
九	経済原論の役割	177

第四章	「経済学の批判」から『資本論』への転回——経済学の原理の成立——	181
-----	----------------------------------	-----

はじめに	181
一 エンゲルス「国民経済学批判大綱」と価値概念	191
二 リカード批判と絶対地代の発見	194
三 「経済学の批判」から『資本論』へ	195
四 マルクスの「プラン問題」とリカードの価値修正論	200
五 ヘーゲル論理学の方法と『資本論』の成立	206
六 「価値から生産価格への転化」という問題	211
七 ヘーゲル論理学から科学としての経済学へ	216
八 「転化」とはなにか	219
九 一般的利潤率の形成と価値法則	226
十 「転形問題」の所在	233
十一 費用価格の生産価格化の問題の含著	242
十二 価値法則の基準と資本主義的生産様式	247
十三 市場価値論と超過利潤	249
十四 『経済学批判』から『資本論』への論理的帰結	256
十五 科学としての『資本論』	267
あとがき	273
参考文献	273

経済学の理論化

——リカード「経済学原理」成立から

マルクス『資本論』三部構成の完成まで——

櫻井 毅 著

凡例

• 本書中に引用している書籍・論文において、欧文文献については、(Smith, 1776)とあるものは、巻末の参考文献、“Smith, Adam, 1776, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Vol. 1-2, London: W. Strahan and T. Carell in the Strand.”を参照されたい。

• また、和文文献については著者名(発行年)の形式になっている。例えば、櫻井毅(一九六八)あるいは(櫻井毅一九六八)とあるのは、巻末の参考文献にある「櫻井毅、一九六八年、『生産価格の理論』、東京大学出版会。」を参照されたい。

• 引用の文献参照の仕方は必ずしも一貫しているわけではなく、前記の方法によらず註に示す場合がある。

第一章 下向から上向へ

——リカード『経済学原理』の経済学説史上の位置

一 ジョン・ウツド編『リカード研究論文集』

リカードの『経済学原理および課税について』は戦前から古典として、我が国でも経済学を学ぶ学生によく読まれていたようだが(一)、戦後もしばらくは広く読まれていたと思う。もちろん戦後はアダム・スミスの『国富論』も人気があった。今は特別の篤学の経済学者を別にすれば、自分の論文執筆に直接役に立つ文献を探し、読み通すのに精いっぱい、誰も古典に目を向けない。ただ、いづれにしても、戦前の一時期、古典研究が熱心に行われた理由の一つに、リカードやスミスの経済学の研究が、戦時中禁じられていたマルクス経済学研究の隠れ蓑であったこともあるようだ。いわゆる近代経済学の研究の方は、戦時中がようやくケインズ革命の始まった時期で、まだ関心を持つ者も少なく、ごくわずかの好学の若手研究者が個人的に研究を始めたばかりであり、あとは悪名高き「皇道」経済学などを避けるとすれば、経済学説史の研究に沈潜するのは、当時の真面目な経済学徒にとって、ほかに選びようのない逃げ道であったともいえる方向なのであった。その戦時中の蓄積が戦後の経済学史研究の隆盛となって現れてくるのであるが、私のように戦後間もない時期に経済学に入り、簡単には新しい研究成果に接する機会を得られなかった未熟な学生は、せいぜい戦前の森耕二郎

(一九二六)、堀経夫(一九二九)、波多野鼎(一九二八)などを繰り返し読みしかなかった。それらは大学図書館に常備され、また戦後もひどい用紙で増刷もされていて、本屋でもよく見かけた。それらの優れた解説を通しておぼろげながらリカード理論の核心は少しは理解できたような気がしたものだ。その後、研究は価値論だけでなく地代論、蓄積論などの分野に広がり、同時にマルクスの『剰余価値学説史』の研究に没頭することになっていったのだが、最近の日本では、以前のように活発にリカード研究が行われているとは言えないようだ。リカードに関する理論的興味がより精緻なマルクス経済学研究の方に向かったためもあつただろうか。だから逆にリカードに対する関心が薄れたのだろうか。リカード研究にはもちろんそれ自体独自の意義があり、例えば、新リカード派としてスラッフアの学説がかなり注目されて論じられたこともあつたが、今はそれほどでもない。あるいは日本では経済学史の研究の主流が理論研究から経済思想の研究の方に流れている傾向があつたからかもしれない。それも今はスミスとその周辺のスコットランド啓蒙の研究に集中している印象がある。どういう理由であるにせよ、未だにリカードやその周辺の学説研究にこだわりの残っている私にとつては、日本における経済学説史の理論的研究の停滞は寂しい限りである。

そういう状況の中で、私は昔の頃のことを思い出しつつ、最近のリカード研究がどうなっているのかわかりたいと思っていた。日本を含めて世界のリカード研究の現状を紹介した立派な本が最近英文で出版されたという事実が啓発されたということもある。そして英語の文献だけしか載っていないのが残念だが、John Cunningham Wood 編集の *The Croom Helm Critical Assessments of Leading Economists*

の中) *David Ricardo: Critical Assessments* (Wood, 1985) というシリーズがあり、一九八五年というやや古い刊行ながら、その全四分冊からなる浩瀚なリカード研究論文集の中に、近年の研究を含めた欧米のリカード研究の動向と成果を見ることができるかもしれないと思つた。

以前、購入して持っていたのだが、ほとんど利用することなく、書架に置かれたままになっていたものだ。このところ嫌々進めている蔵書の整理の対象になると思つて開いてみたのだ。ところどころに鉛筆の書き込みが少しあったから、全然読んでいないことはなかったようだが、ほとんど記憶は残っていない。その中にははるか以前の発表の折に、私が直接雑誌で読んでいた論文もいくつか収められていて、懐かしい思いがしたが、他方で知らなかった古い論文も、重要な貢献としていくつか掲げられてあるのにも気がついた。

すでに戦前日本でも翻訳された『リカード研究』の著書のあるヤコブ・H・ホルンダー (Hollander, 1983a), (Hollander, 1985c), (Hollander, 1985b) の論文やリカードの著書の編者としても名高いエドワード・ゴッナー (Gonner, 1985) の論文などが挙げられていて、未読であるだけに興味をそそる。この論文集は第一分冊でリカードの伝記とその思想の輪郭を扱った論文を集め、第二分冊はリカードの『経済学原理』そのものを対象にした論文を扱う。第三分冊では、リカードの様々な経済分析を検討した論文が中心で、最後の第四分冊が、リカードについての特殊なテーマを取り上げた論文を集めるという構成になっている。リカード研究に「こころざす者」としてはまさに貴重な文献集といつてよからう。収録した論文数は一一〇に及んでいる。

今更ながらではあるが、面白そうなので、俄然思い立ってそこからいくつか選んで読んでみようと考えた。昨年、年来の宇野理論についての考えをまとめた本を書いて出版したせいで、書き落した問題が残っているのが気になるもの、あわてて書かなければならない次の大きな目標が当面なくなつて、気が緩んだということもある。

大学を辞めてから二十何年、その間、本や論文もかなり書いてはきたが、八十八歳を今年さらに越えて、ようやく少し暇ができたためもある。当然、何の目的があるわけでもない。ただ何が書いてあるか読んでみたいと思っただけだ。そして中身を、つれづれなるままに読み碎いていこうと考えたのである。浮世を離れて、古人のように方丈ならぬ、しかし同じように小さな部屋の片隅で、横文字をゆっくり読むのも、新型コロナ・ウイルス禍のもたらした新しい人生の過ごし方やもしれぬということろだろうか。筆でも万年筆でもないパソコンのキーの操作でこんなものを書こうと考えていると、気持ちがい様なものぐるしくなってくるのも、ひたすら蟄居して話す相手もなく無為に時を過ごすしかない哀れな老人のたわごとにすぎないことを感じているせいかもしれない。

(1) 日本におけるリカードの最初期の翻訳には、一九二一年に、ほぼ同時に出版された、和田佐一郎抄訳(一九二一)と堀経夫抄訳(一九二二)がある。全訳は一九二八年に出版された堀経夫(一九二八)、小泉信三(一九二八)が知られている。

あとがき

昭和二五年、武蔵高校を卒業して、私はそのまま前年に出来たばかりの新制の武蔵大学に入学したのだが、それは、高校の卒業前の十二月に発症していた結核の療養の継続を休学なしで実現できる唯一の選択のつもりであった。しかし実際には、大学に通学することはほとんどなかった。三年ほど経って突然、病気が完治していたことが分かり、大学四年目にして初めて経済学の勉強らしいことを自分で始めることにしたが、それはリカードの「経済学原理」を原典で読むということであった。きっかけは、健康が回復した以上、卒業後の道を思案しながら、とりあえず何とか早く今の状況から脱出しようとして、卒業に必要な単位を大慌てで集めなければならなかったときに、ゼミと外国書講読という科目が必修で、そのため真つ先に取ることに決めたのが岡茂男助教授の「リカード経済学原理」の講読だったことだ。そして、それがはじめからとても面白かったということがあった。ただ授業の進みがひどく遅く、買わされたテキストそのものも中途半端なものだったので、自分でゴンナー版 (Ricardo, 1890) の古本を買ってきて先を読み始めたのだ。英語そのものは格別難しくなかったのだが、内容を理解するのがなかなか困難であった。今までそういう類いの英語の本は読んだことがなかったのも、挑戦の意欲を生む理由になったのかもしれない。岩波文庫でとても厚い小泉信三訳の古い一冊本が幸いわが家にあつたので参照することも多かったが、この翻訳も古風でなじみにくい文章

であった。この小泉訳本はその後改訂されて二冊本になったのであらためて買い求めたが、その文章は相変わらず古臭いままで、まったく代わり映えない印象であった。

リカードの「経済学原理」は、その後、別の大学の大学院に進学してからも、Stafia 版などで、初版の第一章を含めて何度も読み返したから愛着もあるし、今でも考えさせる刺激的な内容にとっても興味を持っている。私はたまたま、その後、大学院を経て研究を職業として武蔵大学に奉職することになったのだが、東大の院生として最初に書いた論文もリカードを扱ったものだったし、以後マルクス研究に専念するきっかけもリカードにあったような気もする。また、リカードについては後でも何度か論じる機会があった。そういうわけでリカード経済学の研究は自分の研究者としての原点だったかもしれないと思うことがある。

一昨年（二〇二四年）十二月七日に、私の主催する研究会を、自分の最後の報告会のつもりで武蔵大学の教室でひらいた。私自身は予想していなかったものだが、岡本英男さん、亀崎澄夫さん、小野成志さんたちが、私の講演会として特別に設定してくれたのであった。研究者仲間の若い友人たちが集まってくれた。長年緑内障を病み、近年になって二十数年前の腎臓ガンの摘出手術に由来する腎臓の病に苦しみ、記憶の薄れる九三歳の高齢の私は、それでもなお論文の執筆は続けていたが、なかなか思うようには綴れないで悩んでいたところでもあった。それは与えられたありがたい機会だと思つて、私の長期にわたる研究のテーマの一つであったマルクスの生産価格論について、この際、私

の研究の結論をお話しておくことのできる良い機会だと思った。当日、マルクスの生産価格論についての報告を行ったものの、時間の配分が前半に過剰になり、また、講演という形式上の制約もあって、『資本論』そのものに即した説明が必ずしも委曲を尽くしたものとは言えなかった。それで、主要部分について改めてすぐあとに論文に書き直したものが第四章である。

それまでの一章から第三章の各章は、それぞれ独立に書かれ、または語られたものではあるが、事實上、その結論にいたるリカード以来の学説史的な展開であり、その行程におけるマルクスの努力とその成果を確立していく過程を叙述したものといえよう。

私は第四章を昨年（二〇二五年）の四月に書き上げてから体調を悪くしていた。そして六月に病院に入院して種々検査の結果七月から人工透析の治療生活に入り、現在週三回透析の数時間をクリニクに通院している。この「あとがき」や「序言」は透析治療を開始したのち書いたものだが、本書の本格的な内容部分については基本的に手を入れることがなかったのである。手元に文献、資料が大部分すでに失せており、参照することができなかったこともあり、病氣と疲労が重なり、老齢で頭脳が明晰さを欠くことが障害にもなったのである。

第一章から第三章の各章については、あらためて読み返すと、重複も多く、書き改めたいところがないではないが、さりとて趣旨に大きな違いが生じているわけではないと考えられるので、取り立てて手を加えることはしなかったし、実際できなかった。それでも第一章については多少文章を追加した。第二、三章については気づいた何か所かを直し、若干の章句を追加した。また、全体として、各

論文に細かな見出しを付け加えたい。それ以外には、以前に『武蔵大学論集』に掲載した際の各論文内容と大きな変更はない。

第四章については、本書に収録するに際して論文に若干の加筆、修正をほどこした。

といっても、それらの論文にみられるように、とりあえずの結論であつて、そこまでしか解らなかつたということでもある。

本書に収録された論考の初出は、以下の通りである。

第一章

△研究余話▽下向から上向へ——リカード「経済学原理」の経済学史上の位置、『武蔵大学論集』、二〇二二年度・第六八巻第一号、武蔵大学経済学会、二〇二二年一月二五日

第二章

△研究会報告▽マルクスはリカードを真に超えることが出来たのか——内在的本質としての価値とその実在的形態としての生産価格——、『武蔵大学論集』、二〇二二年度・第七〇巻第二・三・四号、武蔵大学経済学会、二〇二三年三月二四日

なお、本書では、当日配布したレジュメを「配付資料」として加えた。

第三章

【覚書】マルクスが自らの生産価格概念に課した真意——『資本論』第三部の方法的意図——、『武蔵大学論集』、二〇二三年度・第七一巻第一・二・三・四号、武蔵大学経済学会、二〇二四年三月一日

第四章

【論文】「経済学批判」から「資本論」への転回——経済学の原理の成立——、『宇野理論を現代にどう活かすか』Newsletter' 第二期第三三三号——通巻第四五号、二〇二五年八月三〇日、

URL: <https://unoththeory.org/files/2-33-2.pdf>

本書のもととなった各論考の作成にあたっては、第一章から第三章については、私が何度か書き直した原稿を詳細に検討され、目の具合がよくない私に、誤字脱字の類いから内容、表現、説明の曖昧さなどについても繰り返し適切な助言を賜った鈴木和雄氏に改めて感謝を捧げたい。

なお、私は現在人工透析治療の関係もあり、老人介護施設に入居中なので、参考文献の作成などについては中川辰洋氏に、校正については佐藤公俊氏に、全面的にお願いすることになった。記して感謝を申し述べたい。

また、第二章については、武蔵大学の私の元ゼミの学生で、研究会に参加した佐々木勝年氏、国分早苗氏に研究会報告の文書化に当たって頂いた助言と助力にもお礼を申し添えるものである。

研究に終わりがあるとは思えない。ただ私が考えたのはそこまでであったということだ。ご判断ご批評は、もちろん読者にお任せするほかにはない。

なお、本書の校正作業中に、私の眼疾は、もはや文字さえ読むことができなくなるほどに悪化し、爾後の校正は口述筆記に頼る以外に術がなかった。このため、当初考えていたような改訂や補筆を断念せざるを得なかった。本書には、多くの不十分な点を残したままとなったが、もはや如何ともし難く、読者諸兄のご寛恕を乞う次第である。

最後に、本書の制作にあたって、企画から編集、校正にいたるまで多くのご尽力をいただいた小野成志氏のご厚意にお礼を申し上げるものである。

二〇二六年二月

櫻井 毅

参考文献

- Ashley, William J. 1907 "The present position of political economy," *The Economic Journal*, Vol. 17, No. 68, p. 469, 12.
- Borkiewicz, Ladislaus von, 1906 "Wertrechnung und Preisrechnung im Marxschen System," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Vol. 23, pp. 1–50.
- De Quincey, Thomas, 1844 *The Logic of Political Economy*, Edinburgh: William Blackwood and Sons.
- Dunbar, Charles F. 1887 "Ricardo's Use of Facts," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 1, No. 4, p. 474.
- Dunbar, Charles F. 1904 "Ricardo's Use of Facts," in *Economic Essays*, pp. 68–70, London: The Macmillan Company.
- Engels, Friedrich, 1844 "Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie," *Deutsch-Französische Jahrbücher*, pp. 86–114.
- Gomner, Edward Carter Kersey, 1891 "Introductory Essay," in *David Ricardo: Principles of Political Economy and Taxation*, pp. xxii–lxii, London: George Bell & Sons, Edited with an Introductory Essay, Notes, and Appendices by E. C. K. Gomner. Includes editor's Preface (pp. v–vi).
- Gomner, Edward Carter Kersey, 1985 "Ricardo and His Critics," in Wood, John Cunningham ed. *David Ricardo: Critical Assessments*, Vol. 1, pp. 10–18, London: Croom Helm, Originally published in *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 4 (April 1890), pp. 276–290.
- Halévy, Elie, 1972 *The Growth of Philosophic Radicalism*, London: Faber & Faber, Translated from French by Marie Morris.
- Hollander, Jacob H. 1985a "The Development of Ricardo's Theory of Value," in Wood, John Cunningham ed. *David Ricardo: Critical Assessments*, Vol. 2, pp. 21–57, London: Croom Helm, Originally published in *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 18 (August 1904), pp. 455–491. Exact pagination in volume may vary; located in Vol. 2.

- Hollander, Jacob H. 1985b “Some Unpublished Letters of Ricardo,” in Wood, John Cunningham ed. *David Ricardo: Critical Assessments*, Vol. 1, pp. 8–9, London: Croom Helm, Originally published in Quarterly Journal of Economics, Vol. 10 (January 1896), pp. 209-217.
- Hollander, Jacob H. 1985c “The Work and Influence of Ricardo,” in Wood, John Cunningham ed. *David Ricardo: Critical Assessments*, Vol. 1, pp. 42–51, London: Croom Helm, Originally published in American Economic Review, Vol. 1 (March 1911), pp. 71-84.
- Hutchison, Terence W, 1953 “James Mill and the Political Education of Ricardo,” *Cambridge Journal*, Vol. 7, No. 2, pp. 81–100.
- Hutchison, Terence W, 1978 “James Mill and Ricardian Economics,” in *Revolutions and Progress in Economic Knowledge*, Chap. 2.
- Lange, Elena Louise, 2014 “Failed Abstraction – The Problem of Uno Kōzō’s Reading of Marx’s Theory of the Value Form,” *Historical Materialism*, Vol. 22, No. 1, pp. 3–33.
- Lange, Elena Louise, 2021 *Value without Fetish: Uno Kōzō’s Theory of Pure ‘Capitalism’ in Light of Marx’s Critique of Political Economy* in, *Historical Materialism*, No. 227, Leiden: Brill Academic Publication.
- Mandeville, Bernard, 1714 *The Fable of The Bees: or, Private Vices, Publick Benefits. Containing, several discourses, to demonstrate, that human frailties; ... may be turn’d to the advantage of the civil society*, London: J. Roberts.
- Marshall, Alfred, 1890 *Principles of Economics*, London: Macmillan.
- Marx, Karl, 1859 *Zur Kritik der politischen Ökonomie: Verlag von Franz Duncker*.
- Marx, Karl, 1941 *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie: Rohentwurf 1857-1858, Anhang 1850-1859*. Verlag für fremdsprachige Literatur.
- McCulloch, John Ramsay and John Locke, 1870 *The Principles of Political Economy: with a Sketch of the Rise and Progress of the Science*, London: A. Murray and Son.
- Meek, Roland L. 1956 “Some notes on the ‘Transformation Problem’,” *The Economic Journal*, Vol. 6261, pp. 94–107.

- Mill, James, 1808 *Commerce defended. An Answer to the arguments by which Mr. Spence, Mr. Corbett, and others, have attempted to prove that commerce is not a source of National Wealth*, London: Baldwin, Cradock, and Joy.
- Mill, James, 1817 *The History of British India*, Vol. 1–3, London: Baldwin, Cradock, and Joy.
- Mill, James, 1821 *Elements of Political Economy*, London: Baldwin, Cradock, and Joy.
- Mill, James, 1826 *Elements of Political Economy*, London: Baldwin, Cradock, and Joy, 3rd edition.
- Mill, James, 1836 “Whether Political Economy is useful?” *The London Review*, Vol. 2, No. 4, pp. 553–572.
- Mill, John Stuart, 1834 “On Miss Martineau’s Summary of Political Economy,” *The Monthly Repository*, Vol. 8, No. New Series, pp. 318–322, May.
- Mill, John Stuart, 1843 *A System of Logic, Ratiocinative and Inductive: Being a connected view of the principles of evidence, and the methods of scientific investigation*, Vol. 1–2, London: John W. Parker.
- Mill, John Stuart, 1844 *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, London: John W. Parker.
- Mill, John Stuart, 1848 *Principles of Political Economy: With some of their applications to social philosophy*, Vol. 1–2, London: John W. Parker.
- Mill, John Stuart, 1873 *Autobiography*, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.
- Ramsay, George, 1836 *An Essay on the Distribution of Wealth*, Edinburgh: A. & C. Black; Longman, Rees, Orme, Brown, Green, and Longman.
- Ricardo, David, 1815 *An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock; Shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation. With remarks on Mr. Mathus’ Two Last Publications*, London: John Murray.
- Ricardo, David, 1817 *On the Principles of Political Economy and Taxation*, London: John Murray.
- Ricardo, David, 1890 *Principles of Political Economy and Taxation*, Bohn’s Economic Library, London: George Bell and Sons, With introductory essay, notes, and appendices by E. C. K. Gonner.

- Ricardo, David, 1951a "Letters 1810–1815," in Sraffa, Piero and M. H. Dobb eds. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. VI, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ricardo, David, 1951b "Letters 1816–1818," in Sraffa, Piero and M. H. Dobb eds. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. VII, Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, Adam, 1776 *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Vol. 1–2, London: W. Strahan; and T. Cadell in the Strand.
- Sraffa, Piero, 1952 *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. 6: Cambridge University Press.
- Steuart, James, 1767 *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy: Being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations*, Vol. 1–2, London: A. Millar, and T. Cadell.
- Stigler, George J. 1958 "Ricardo and the 93% labor theory of value," *The American Economic Review*, Vol. 48, No. 3, pp. 357–367.
- Sweezy, Paul, 1942a *The Theory of Capitalist Development*, London: D. Dobson.
- Sweezy, Paul, 1942b *The Theory of Capitalist Development: Principles of Marxist Political Economy*, London: Monthly Review Press.
- Uno, Kōzō, 1980 *Principles of Political economy: Theory of a Purely Capitalist Society*, Sussex and New Jersey: Harvester Press/Humanities Press, Translated from Japanese by Thomas T. Sekine.
- Walras, Léon, 1874 *Éléments d'économie politique pure ou théorie de la richesse sociale*, Lausanne and Paris and Bâle: Imprimerie L. Corbaz & C^{ie}, Guillaumin & C^{ie} et H. Georg. C^{ie}.
- Wintertiz, J., 1948 "Values and prices: A solution of the so-called transformation problem," *The Economic Journal*, Vol. 58, No. 230, pp. 276–280.
- Wood, John Cunningham ed. 1985 *David Ricardo: Critical Assessments*, Vol. 1–4 of Croom Helm critical assessment of leading economist, London: Croom Halm.

- 岩田弘、一九六〇年、「剰余価値の利潤への転化」、鈴木鴻一郎（編）『利潤論研究』、一―五四頁、東京大学出版会。
- 岩田弘、一九六七年、『マルクス経済学（上）』、盛田書店。
- 宇野弘蔵、一九五〇年、『経済原論（上・下）』、岩波書店。
- 宇野弘蔵、一九六四年、『経済原論』、岩波全書、岩波書店。
- 宇野弘蔵、一九七〇―一九七三年、『資本論五十年（上・下）』、法政大学出版社。
- 宇野弘蔵、一九七四年、「社会科学とは何か」、『宇野弘蔵著作集』、第九卷、岩波書店。
- 宇野弘蔵、二〇〇八年、「社会科学はどうしてできたか」、『資本論』と私』、御茶の水書房。
- 大内力、一九五八年、『地代と土地所有』、東京大学出版会。
- 大野節夫、一九八五年、「経済学批判」から『資本論』へ―「埋もれたリンク」―一八六二年二月―（下）』、『経済』、第二五七卷。
- 改造社（編）、一九二九―一九三二年、『マルクス・エンゲルス全集』、第八―一〇卷、改造社、第八卷（昭和四年）剰余価値学説史第一卷、向坂逸郎訳、第九卷（昭和五年）剰余価値学説史第二卷第一部、大森義太郎訳、第十卷（昭和六年）剰余価値学説史第二卷第二部、猪俣津南雄訳。
- 斎藤幸平、二〇二〇年、『人新世の「資本論」』、集英社。
- 桜井毅、一九五八年、「価値の生産価格への転化について」ポルトキヴィッツといわゆる「転化問題」、『武蔵大学論集』、第五卷、第二号。
- 桜井毅、一九六〇年、「市場価値論の問題」、『利潤論研究』、一〇五―一四九頁、東京大学出版会。
- 桜井毅、一九六二年、「市場価値論の形成について」、『武蔵大学論集』、第一〇卷、第三号。
- 桜井毅、一九六八年、『生産価格の理論』、東京大学出版会。
- 櫻井毅、一九七五年、「ジェームズ・ミルとリカード理論の形成」、『武蔵大学論集』、第二三卷、第一・二・三合併号。

- 櫻井毅、一九八八年、『イギリス古典経済学の方法と課題』、ミネルヴァ書房。
- 櫻井毅、二〇〇四年、『経済学史研究の課題』、御茶の水書房。
- 櫻井毅、二〇二四年、『資本論』第三部におけるマルクスの困惑と混迷―生産価格論を中心として―、日本教
育技術コンサルティング合同会社。
- 鈴木鴻一郎（編）、一九六〇年、『経済学原理論（上）』、東京大学出版会。
- 鈴木鴻一郎（編）、一九六二年、『経済学原理論（下）』、東京大学出版会。
- 高木幸二郎（編）、一九六二年、『経済学批判要綱』、第四卷、大月書店、高木幸二郎訳。
- 高須賀義博（編）、一九八九年、『シンポジウム『資本論』成立史』、新評論。
- 富塚良三、一九九四年、『序説』、富塚良三・服部文男・本間要一郎（編）『資本論体系』、第五卷、有斐閣。
- 波多野鼎、一九二八年、『価値学説史』、第一卷、巖松堂書店、正統学派の価値学説。
- 堀経夫、一九二九年、『リカアドウの価値論及び其の批判史』、岩波書店。
- 堀経夫、一九四九年、『リカアドウ学派における生産価格論』、高橋誠一郎・他（編）『正統学派経済学説研究』、
第一卷、経済理論、泉文堂。
- 森耕二郎、一九二六年、『リカアドウ価値論の研究』、岩波書店。
- 森嶋通夫、一九九一年、『リカアドウの経済学』、分配と成長の一般均衡理論』、高増明・他訳、東洋経済新報社。
- 山中隆次・鶴田満彦・吉原泰助・二瓶剛男、一九七六年、『マルクス資本論入門』、有斐閣。
- フリードリッヒ・エンゲルス、一九五九年、『国民経済学批判大綱』、『マルクス・エンゲルス全集』、第一卷、大
月書店。
- ジョン・スチュアート・ミル、一九八〇年、『マーティノー女史の経済学』、『J・S・ミル初期著作集二』、御
茶の水書房。
- フリードリッヒ・ヘーゲル、一九五二年、『哲学入門』、岩波書店、武市健人訳。
- フリードリッヒ・ヘーゲル、一九六八年、『小論理学』、下、岩波書店、松村一人訳。

- カール・マルクス、一九六一年、『経済学批判要綱』、第三卷、大月書店、高木幸二郎訳。
- カール・マルクス、一九六二年、『経済学批判要綱』、第四卷、大月書店、高木幸二郎訳。
- カール・マルクス、一九六五年、『資本論第一a』、第二三a卷、マルクスⅡエンゲルス全集、大月書店。
- カール・マルクス、一九六六年、『資本論第三a』、第二五a卷、マルクスⅡエンゲルス全集、大月書店。
- カール・マルクス、一九七〇年、『剰余価値学説史Ⅲ』、第二六卷、マルクスⅡエンゲルス全集、大月書店、第2分冊。
- カール・マルクス、一九八一—一九九三年、『資本論草稿集』、資本論草稿集翻訳委員会訳、第一—二卷、大月書店。
- カール・マルクス、一九八四年、『資本論草稿集（経済学批判V）』、資本論草稿集翻訳委員会訳、第八卷、大月書店。
- リカアドウ、一九二二年、『経済原論』、堀経夫訳、岩波文庫、岩波書店。
- リカアドウ、一九二八年、『経済学及課税之原理』、小泉信三訳、岩波文庫、岩波書店。
- リカアドウ、一九二八年、『経済原論（上・下）』、堀経夫訳、弘文堂書房。
- リカードー、一九二二年、『経済原理』、和田佐一郎訳、内田老鶴圃。
- レフ・ヴィゴツキー、一九六七年、『資本論の生誕』、富岡裕訳、新読書社。
- デ・イ・ローゼンベルグ、一九三三年、『資本論註解』、第一—四卷、改造社、直井武夫、淡徳三郎訳。
- デ・イ・ローゼンベルグ、一九六二年、『資本論註解』、宇高基輔・副島種典訳、第四卷、青木書店。

主要著作

- 『生産価格の理論』東京大学出版会、1968年
- 『宇野理論と資本論』有斐閣、1979年
- 『恐慌論の新展開』(共編著)社会評論社、1985年
- 『イギリス古典経済学の方法と課題』ミネルヴァ書房、1988年
- 『アダム・スミスの娘たち—6人の女性経済学者』(監訳)
御茶の水書房、1988年
- 『随想集 時代を流れる』方丈堂出版、1991年
- 『自ら調べ自ら考える—変貌する大学の中から』方丈堂出版、2001年
- 『講演集 経済学を歩く』新読書社、2003年
- 『経済学史研究の課題』御茶の水書房、2004年
- 『出版の意気地—櫻井均と櫻井書店の昭和』西田書店、2005年
- 『随想集 思い出に誘われるままに』西田書店、2007年
- 『女性経済学者群像—アダム・スミスを継ぐ卓越した8人』(監訳)
御茶の水書房、2008年
- 『資本主義の農業的起源と経済学』社会評論社、2009年
- 『宇野理論の現在と論点—マルクス経済学の展開』(共編著)
社会評論社、2010年
- 『ヴィクトリア時代におけるフェミニズムの勃興と経済学』(共編著)
御茶の水書房、2012年
- 『経済学と経済学者—学ぶ喜びと知る楽しさ』社会評論社、2014年
- 『宇野経済学方法論 私解』社会評論社、2019年
- 『「資本論」第三部におけるマルクスの困惑と混迷：生産価格論を中心として』日本教育技術コンサルティング、2025年

著者紹介

経済学者。1931年7月13日東京市（現東京都）に生まれる。1950年3月武蔵高等学校卒業、同年4月武蔵大学経済学部に進学。1955年3月武蔵大学経済学部卒業、同年4月東京大学大学院に進学。1961年3月東京大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学。1961年4月より武蔵大学経済学部勤務、助手、講師、助教授を歴任。1967年3月経済学博士（東京大学）。1968年4月教授（経済原論および経済学史担当）。1971年6月より1972年3月までロンドン大学のLSE (London School of Economics and Political Science) で在外研究。1984年1月経済学部長（1985年12月まで）。1990年3月より同年5月まで主にロンドンで在外研究。1992年4月武蔵大学学長。2000年3月学長退任、武蔵大学退職。現在、武蔵大学名誉教授

経済学の理論化

一リカード「経済学原理」成立からマルクス『資本論』三部構成の完成まで—

著者 櫻井 毅
発行日 2026年3月6日 初刷
発行所 日本教育技術コンサルティング合同会社
〒102-0084 東京都千代田区二番町9-3
URL: <https://www.edtec.co.jp/>

© 2026 Tsuyoshi Sakurai in Japan
ISBN 978-4-9914564-0-4 Printed in Japan